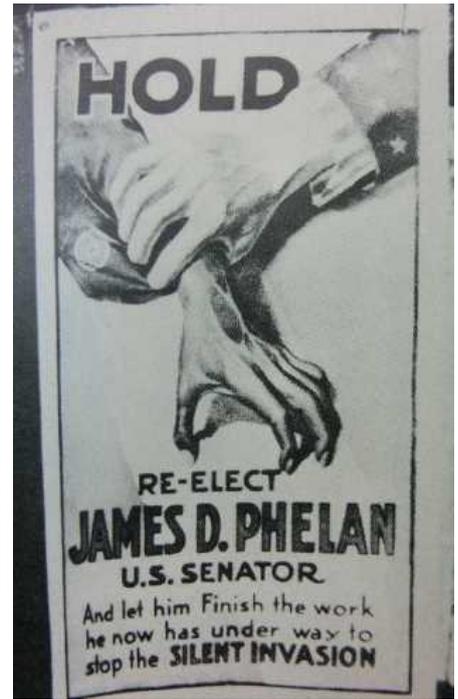


青い目の人形



(明治元年からアメリカに渡った日系移民)



(排日運動の選挙ポスター)

大正時代の末、アメリカでは日系移民が急増し、大きな社会問題になり、やが

て日系移民排斥法が作られました。日本の軍事力も力を増した時代でもあり、日米間は緊張感が高まったのです。その折り、親日家でもあった宣教師『ギュリック』が、この問題の解決に、子ども達から仲良くしようと、世界児童親善協会を組織しました。この協会は『親善人形を送る運動』を全米に呼びかけました。博士の呼びかけでこの運動は広がりを見せ、人形は全米で約12700体集まりました。日本側の窓口は、実業家『渋沢栄一』でした。

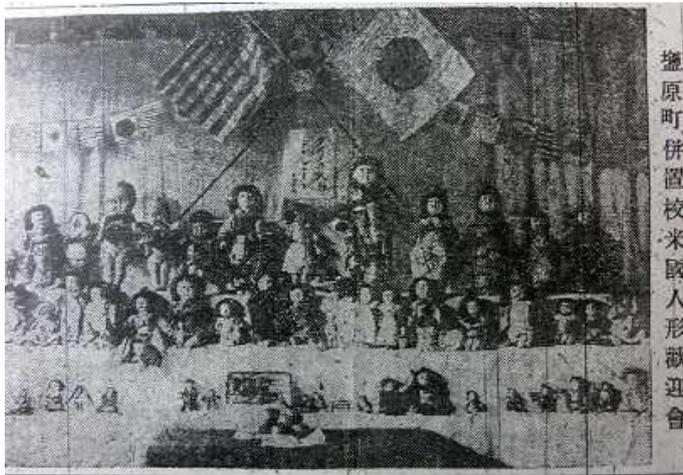


昭和2年、日本のひな祭りに合わせて、人形は親善大使としてアメリカから送られ、全国各地の小学校や幼稚園に配布されました。当時、外地と呼ばれた朝鮮や台湾の学校にも配られたのです。

送られた当初は話題性もあり、新聞各社も1年以上様々に取り上げました。一体一体に名前が付けられ、パスポートも携えました。アメリカの子ども達が書いた手紙と、着替えも持っていました。人形をもらい受けた学校では、町や村をあげて、盛大



な歓迎会を開き、大事にされたのです。



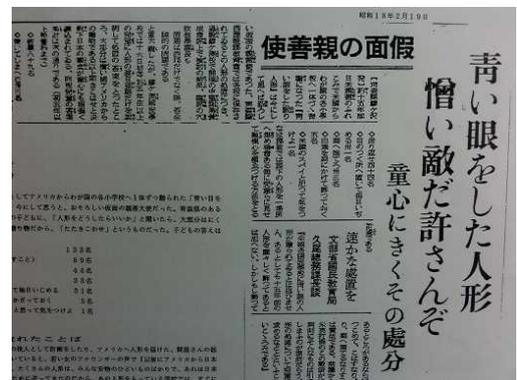
(塩原町立塩原小学校の歓迎会)

(人形が携えたパスポート)



その年の暮れには、クリスマスに間に合うようにと、答礼の高価な日本人形約50体が作られ、アメリカへと送られました。

しかし、昭和16年に太平洋戦争が始まると、青い目の人形は敵国アメリカの象徴として、処分の対象になり、ほとんどの人形が壊されたのです。



本校の青い目の人形が残った経緯



本校では、教材室から昭和61年に発見され、平成3年には、数社の新聞社にも取り上げられ、話題になりましたが、当時は残った経緯は分かりませんでした。

今回（平成27年）その調査に乗り出しました。しかし、長い年月が経っていることや、当時を知るお年寄りが高齢のため、証言をすることが難しいなど、調査は困難を極めました。

ところが、調査の中で重要な証言が得られ、本校の青い目の人形の全容が明らかになりました。当時の校長先生が地域の知人に依頼し、その知人が、自宅の蔵の長持ちの中に、ひな人形と一緒に隠したことが分かったのです。また、

(本校のローズィー)人形を見たという大切な証言もいくつも得られ、その当時の時代の様子や、人形にまつわる人々の暮らしや考え方なども分かりました。

